

学校教育における新たな課題に対応した
教員養成・研修の取組の成果と課題
ーアクティブ・ラーニングの窓からー

秋田喜代美

(東京大学大学院教育学研究科)

2015.5.18教員養成部会資料

論点

- 1 これからの時代を見すえた内容・方法としての
アクティブ・ラーニングと教師に求められる知識
- 2 アクティブラーニングの観点から見た教員養成・採用
・研修に関する検討課題

1-1 アクティブラーニングを教師が理解する際に

■ アクティブ・ラーニング & ディープラーニング

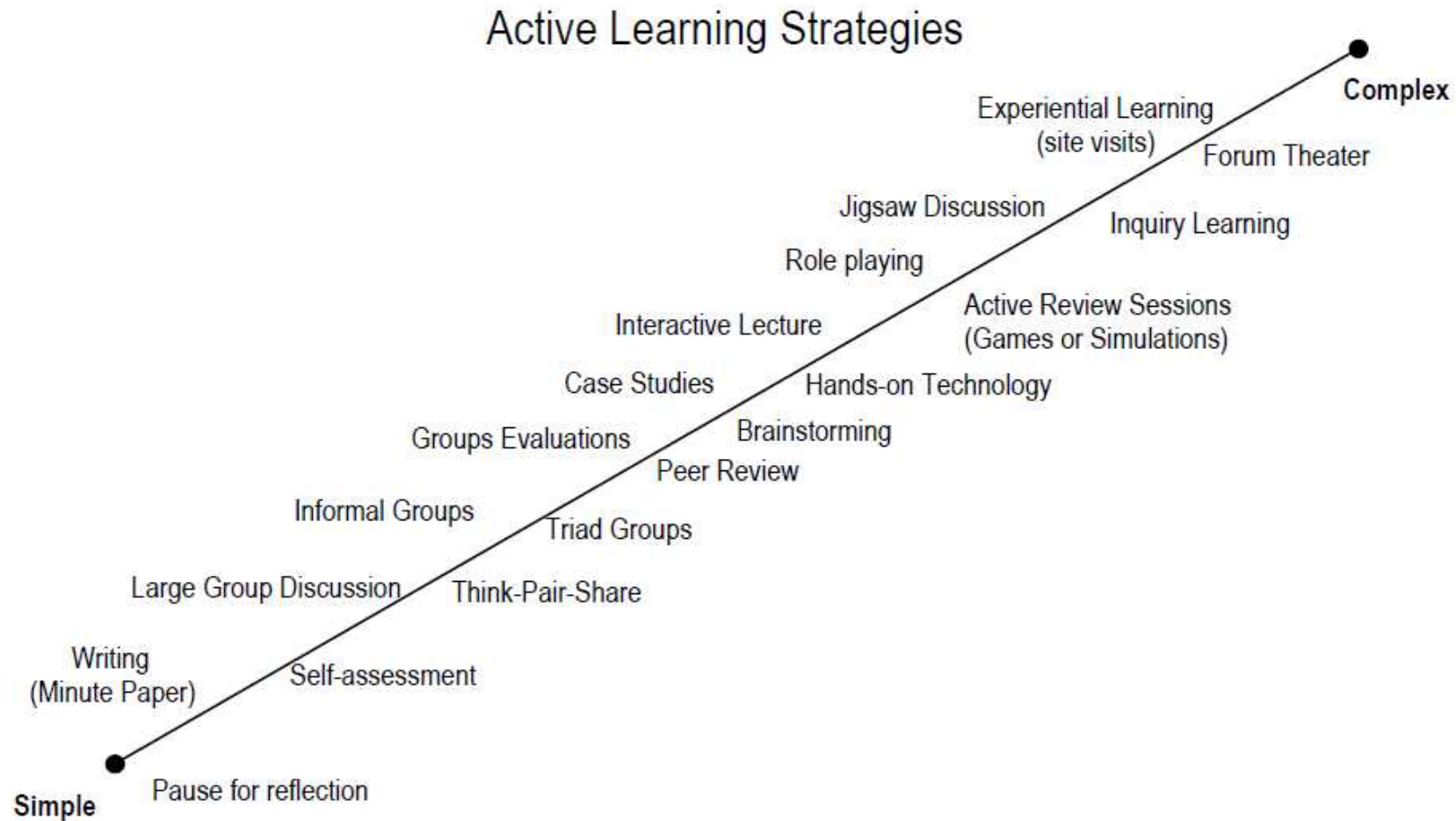
主体的・協働的・能動的な学び(アクティブ・ラーニング)を通して、学びの質を高め深まりを重視する

そのための教育の方法(pedagogy)の拡張・イノベーションの総称。



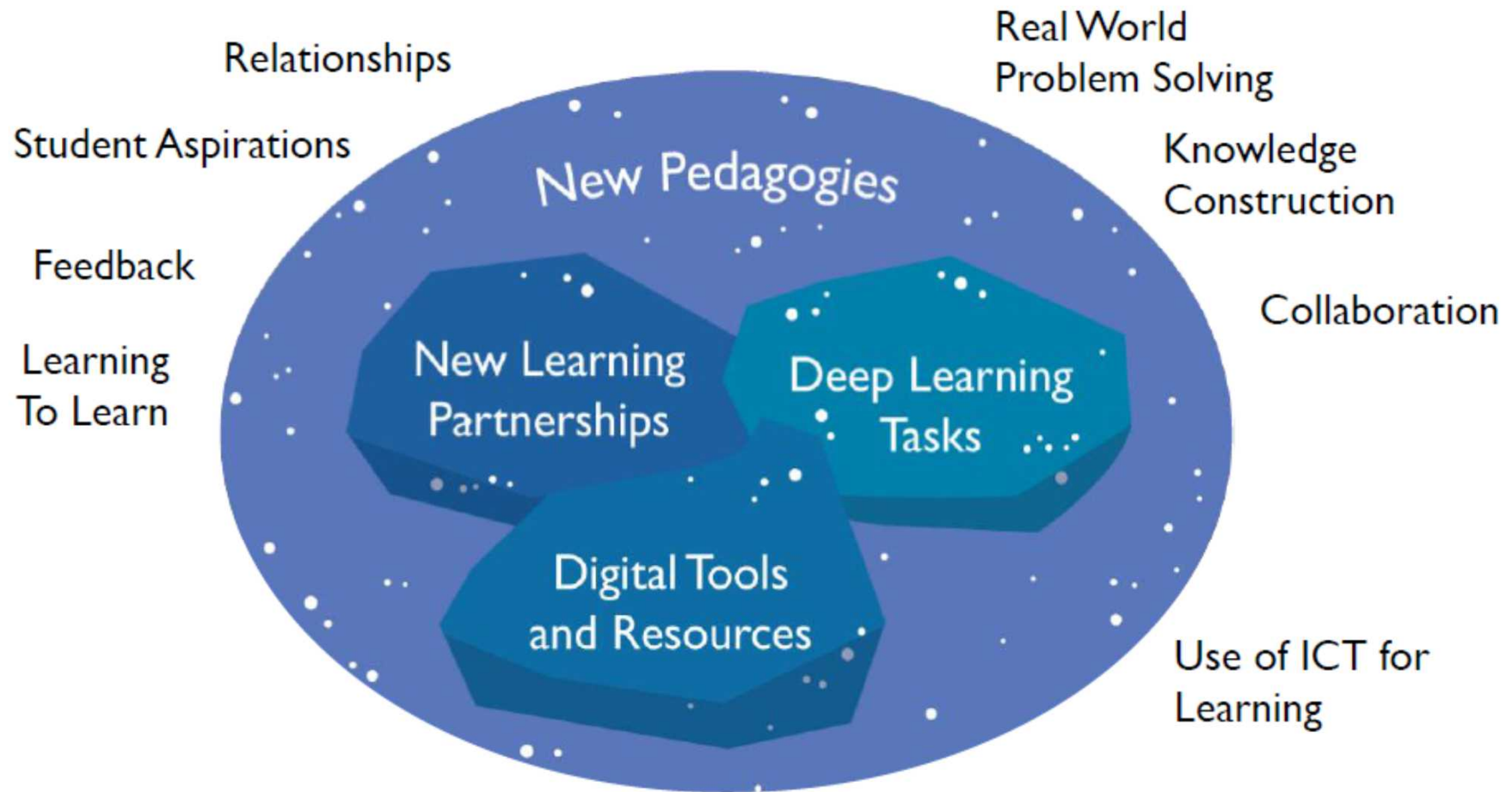
- どの年齢の、いずれの学習者も、より質の高い、深い学びを保障する志向性。生涯発達における学び方の連続性の保障。活動的、協働的、表現的な学習様式。
- 特定の学習法や型、形式の導入ではない。教育システム、カリキュラム、学習環境、教育評価法、教師、学校でのリーダーシップの役割、学校文化の伝承と刷新を伴う

①すべての生徒の深い理解（Deep Learning）を促すためには
多様なアクティブラーニング方略の理解と教師の自律的な判断
と創意工夫が必要（OECD2030. 資料, 2015より）



This is a spectrum of some active learning activities arranged by complexity and classroom time commitment.

②深く学べる学習課題・カリキュラムデザイン力



Fullan and Langworthy, 2014

Langworthy, M (2014) 'New Pedagogies, teaching and Learning for 21st century skills より引用

③革新的な教授学習方法実践のためには 教育の活動システム全体の刷新が生じる (OECD,2013)

学びの時間の場所と質の再考が必要
(例、教室の学びの時間、自己学習の時間、地域での学びの時間、家族・友人との時間からの学びなど)



生徒の「集団」の再考が必要(例、一人で熟考、ペアワーク、グループワーク、クラス外の協働、学校外の協働、海外との協働など)

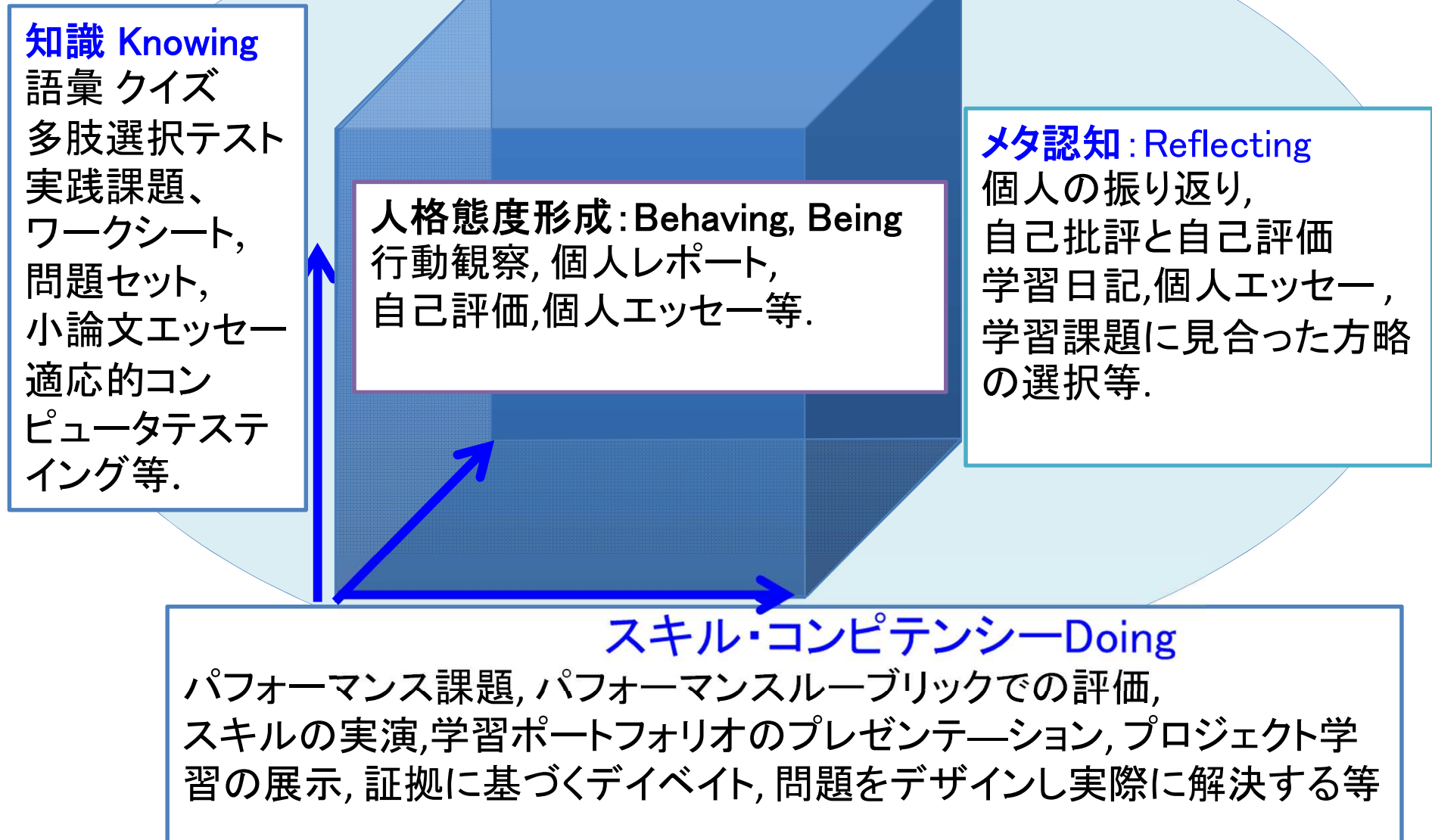
教員は、自己の教授法をルーティーン化させず、常に探究心をもち、多様な革新的な教授法を選択しとして常備している必要

Organisation & pedagogy

- Groupings
- Use of time
- Pedagogy & Assessment

柔軟で、協働的な教授形態が必要
(チームティーチングや、学校外関係者とのコラボなど)

④ 21世紀型カリキュラムと連動した学習成果評価のための量的・質的分析



⑤ 学習法変容への不安・抵抗感と有効性認知を支える 学校の支援体制・リーダーシップのダイナミクス

石橋他(2015)「協働学習に取り組む中等教育学校教師の抱える不安と有効性の認識」東京大学教育学研究科紀要、54

風土・研修・効果モニタリング・同僚性

有効性1
生徒側の変化

不安1
効果への心配

不安3
生徒側の要因としての対人関係等

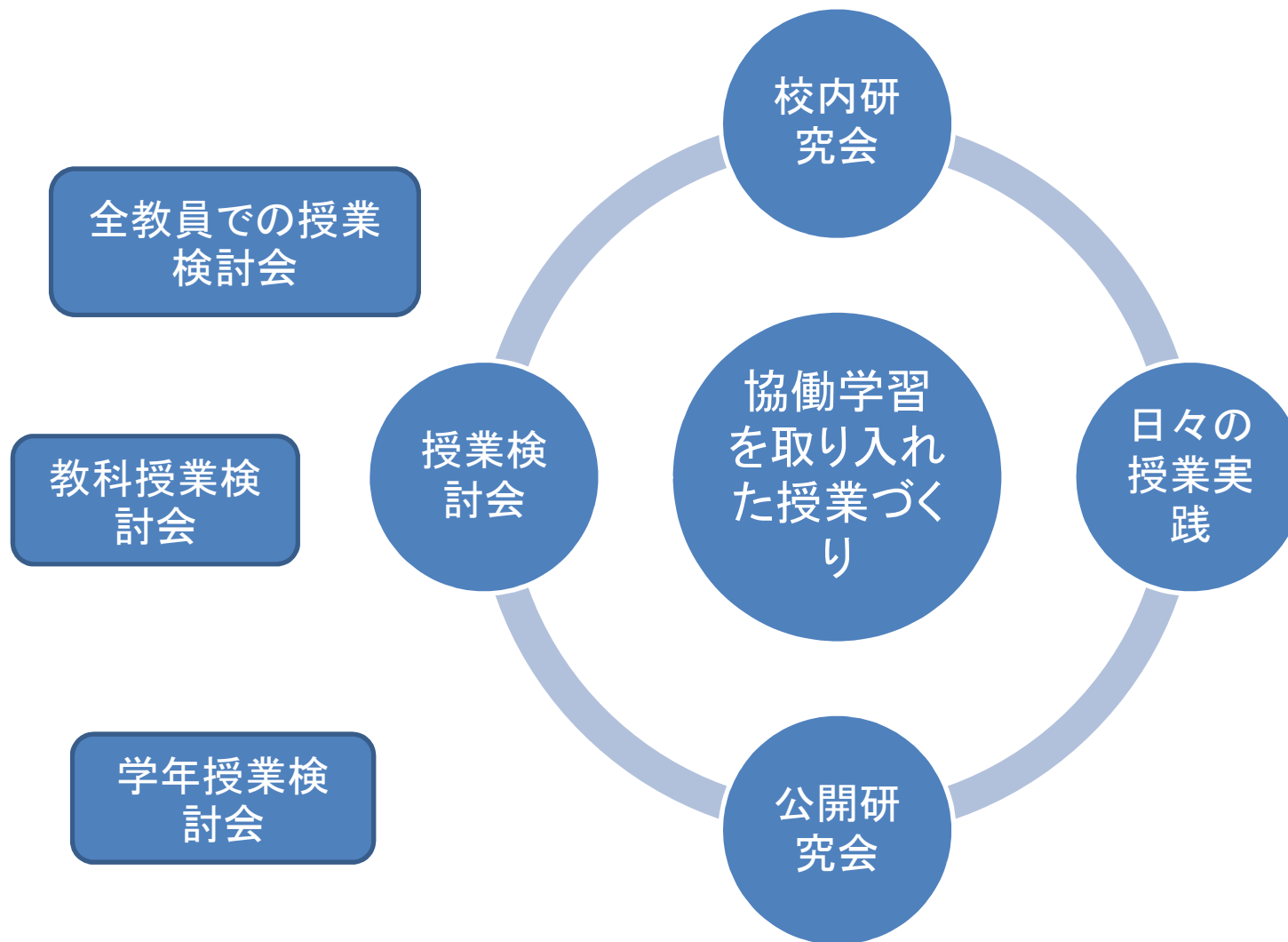
有効性2
実施しての実感と
手ごたえ

不安2
漠然とした不安

不安4
具体的な手立て等

外部からの知識や事例等のリソース資源

サイクルの創出(東京大学附属中等教育学校)



2 具体的な指導実践は多様

| | 学級内 | 学級学年学校間 連携 | 地域や専門家との パートナーシップ |
|-----------|-----|---------------|----------------------|
| 教科内 | | | |
| クロスカリキュラム | | | |
| 社会教育連 | | | |



真正な課題と中核となる問い
バリエーションの見える化が、
児童生徒での探究や評価を
可能にする。
協働・多様性を活かす

郡山市立芳山小学校、2015

協働で主題を設定する(福井大学地域科学部附属中学校)

主題設定の学び

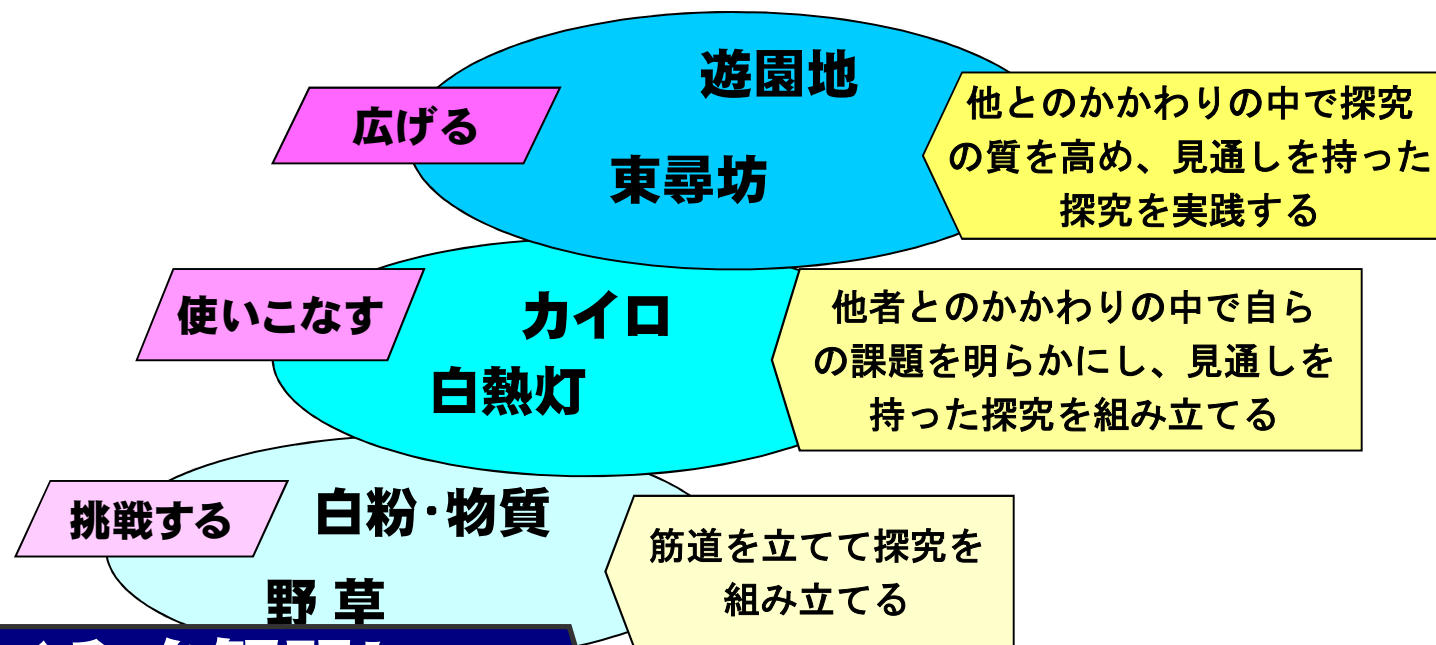


必然性のある協働の学び

3年間の核となるカリキュラムの作成

福井大学附属中学校実践例

理科での探究を核とする主な単元

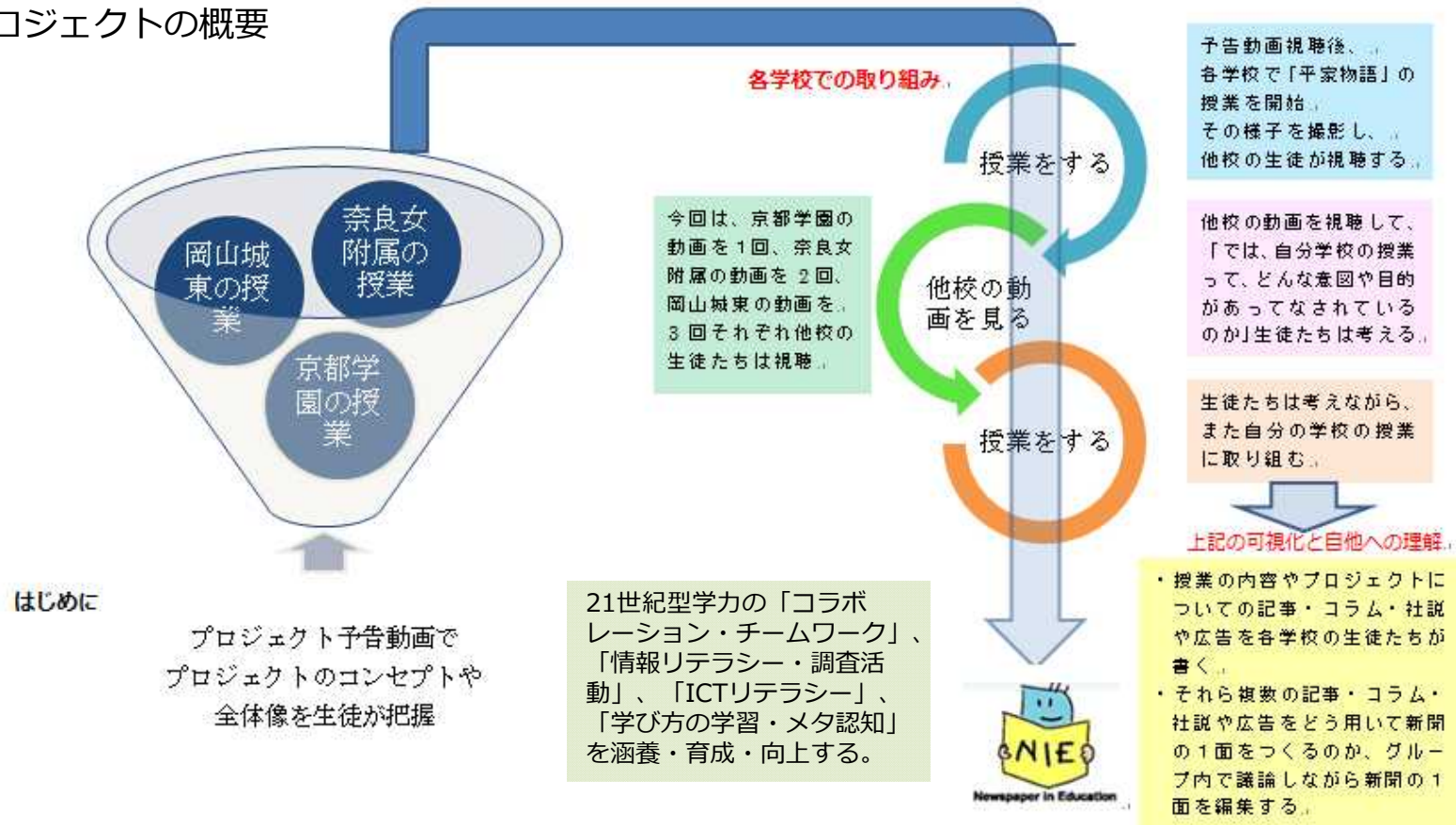


しくみを解明し、
自然観を広げる

高校 学校間を超えるPBL 3高連携プロジェクト (二田、2015)

～岡山城東高校・京都学園高校・奈良女子大学附属中等教育学校を結ぶ「平家物語」と「新聞作り」～

プロジェクトの概要



学習活動と目的

- ① 3校の生徒たちは、プロジェクトのコンセプトを「予告動画」で理解し、自分自身の学習活動の枠組み（スキーム）を認知する。
 - ② 他の学校での学習活動の様子を動画で知った上で自分の所属校の学習活動を行うことによって、自己の学習活動の知的な枠組み（知識・理解で求められているもの、向上を期するスキルや態度）を知り、学習活動への主体的な理解をすすめる。
 - ③ 3校の生徒たちは、このプロジェクトの体験に基づいて、記事・コラム・社説・広告を書く。
 - ④ 3校の生徒を混合した複数のグループを作り、上記の記事・コラム・社説・広告からベストなものを1つずつ議論して選んで新聞の1面を制作し、なぜそういう紙面構成にしたのかを発表する。
- このようなアクティブラーニング的な学習活動を通じて、自他の価値判断の差異を知ることで、メディア・リテラシーとしての情報の選択と表現について経験的に知り、かつ、メタ認知する態度や力の涵養・育成・向上を図る。

Skypeを利用した遠隔地間の協働学習～OECD東北スクールプロジェクトを通じて～



Skype会議の例

年に2回、4～6日間、東北にメンバーが集まり集中スクールを開催するが、それ以外の期間はメールやSkypeなどで連絡をしたり会議を開催したりする必要があった。

奈良女子大学附属の生徒たちはサポート役であったためSkype会議では、司会や議事録を自ら担当。その活動の中で生徒たちは、**自ら右のようなことに気づきアクションを起こした。**

岩手県
大槌町

OECD東北スクール

東北の復興を世界にアピールするビッグイベントをパリで開催することを1つのゴールとしたプロジェクト学習

東日本大震災被災地の中高生約100名が参加
2013年4月 から2014年9月に渡り実施
奈良女子大学附属中等教育学校の有志生徒
約40名（中高生）と、顧問役の教員が継続参加

- ①ファシリテートスキルを身につけることや、異なった価値観や考え方感じ方に触れること、それらによって自らを相対化すること、統合することに意義がある。
- ②なぜ意義があるのか？それは東北スクールで、多様な経験と価値観、考え方感じ方を持つ被災地の中高生や大人たちと活動するのに必要不可欠であるからだと気付いたから。
- ③しかし、それは日本の学校の学習環境では実現できないと察知し、そういった学習環境を得るためにはどうしたらよいか考え、企業向けのプレゼンビデオの制作に至った。

プレゼンビデオのURL <https://youtu.be/6evfAdVrqhE>



3 養成・採用・研修での課題

養成

- 教員養成に関わる大学教員のアクティブラーニングへの知識の必要性
- 実践や実地、実習と理論の往還による事例にもとづく専門的見識の育成
- そのための行政と大学、地域の連携校のチームによる連携の必要

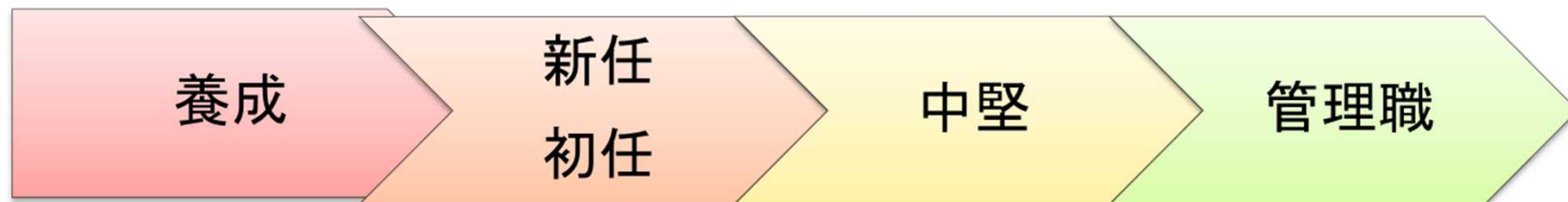
採用

- 試験内容(共通教養、一般教養)の構成原理の見直しの必要性、
- 生徒の理解過程に即した指導の実践的知識(PCK)を捉える内容の試験の導入
- 採用方法の見直しと専任採用:21世紀教育を担う教師の専門性基準を提示することが必要

研修

- 研修における振り返りと日常の授業での実践化のサイクルを創るための校内研修システムの構築
- センター等での年間を通じた継続的で探究的なより専門的な研修
- アクティブラーニングによる新たな学びの過程の実践記録にもとづく専門性基準高度化の認定(育ちや探究の記録)
- 大学での学び直しや専門職の高度化

21世紀の学びを創造する専門家としての教師とネットワーク コミュニティ



ディープラーニング
コミュニティによる知の
創造

